

# 昼と夜の巡礼

黒岩重吾



コンパクト・ブックス

昼と夜の巡礼

一九六八年三月二十日 初版発行  
一九七一年九月二十日 五版発行

定価二五〇円

著者 黒岩重吾

発行者 陶山巖

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ十

電話 東京(285)六一一一

振替 東京 一五六五三

印刷所 中央精版印刷株式会社

著者との了解により検印を  
廃止いたします。

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

© 1968

# 昼と夜の巡礼

黒 岩 重 吾



コンパクト・ブックス

集英社







目次

|         |   |
|---------|---|
| 古い女     | 九 |
| 山頂の一夜   | 三 |
| 夜の修業    | 四 |
| おようとサカキ | 六 |
| 孤独の恵い   | 七 |
| 新しい夜    | 壱 |
| 女の行動    | 三 |
| 心と肌の違い  | 三 |
| 北陸の夜    | 一 |

偽りの計画……………二六

魂のない快樂……………二九

告白の価値……………二七



# 昼と夜の巡礼



## 古い女

世界金屬工業の社長秘書真月葉子が、事業本部長榊原良介と秘密の關係を持つようになってから、すでに二年の月日がたっていた。

結ばれない愛だとか、不倫の關係だという意識は、昨年位の間で、今の葉子に取って榊原の存在は、葉子の感情を超えた生理的なものになっていた。

と云って葉子は毎日榊原に会っているわけではない。良く会って月に三度、榊原の仕事の多忙な時は、月一度ということも珍しくない。会わない間、淋しいと思う時はあるが、胸を切られる程のものではなかった。

二人の間が、どうにも抜き差しならない絡みあいになっていることを、葉子のみならず榊原も知っているようである。

葉子は二十七歳になる。京都の大学の英文科を出て、二十三歳の年に、世界金屬工業の秘書課に入社した。同

期の友達が、マスコミ關係を志望したのに対して、葉子が地味な会社勤めを選んだのは、そのような性格だったからであるし、それなりの事情もあった。

葉子は、学生時代、経済学部に居た木島功と恋愛關係に陥り、身体を与えている。

二人の關係は、卒業するまでであった。青春の火遊びと云えばそれ迄だが、その期間に葉子は青春の炎の総てを燃え尽していた。

一年間に、二度子供をおろしている。葉子が静かな会社勤めを選んだのは、休息の意味もあったようである。

木島は現在、東洋貿易の綿布部に居る。去年の暮、偶然心齋橋で会ったが、葉子は他人を見るような眼で木島を眺めていた。

木島は典型的なホワイトカラー族になっていた。葉子の周囲にうようよしている若手社員の一人にしか過ぎなかった。

それは葉子が社長秘書という重職にあったためかもしれない。若手社員達は、葉子に一步も二歩も下つてものを云った。

真月葉子の家は大阪の阿倍野の近くにあった。国電阪

和線の美章園駅の手前である。

戦前の古い家だが借家ではない。父は阿倍野で雜貨店をやっていた。

梅田、心齋橋などの一流繁華街ではないので、そんなに儲かることはないが、三人の子供が遊んでいても困らない程度の収入はあった。父母の悩みは、葉子が結婚しないことである。

長男は官立大学の経済学部で、弟は高校二年である。女は葉子だけであった。

一週間に一度位、父母は、葉子に結婚をすすめる。そんな時、葉子は殆んど弁解しない。柳に風と受け流していた。

ところが、結婚話は、意外な方から葉子に持ち込まれた。

榊原が葉子に結婚をすすめたのである。葉子は榊原の口からそれを聞いた時、何故か来るものが来た、という気がした。

「分っているだろ、君に対する気持は変わらない、いやだんだん深くなつて行くようだ、だから君が結婚して静かな家庭生活に入るのを望むわけだよ、このままだと、君

が不幸になつて行くような気がして仕方ない」

「不幸と思わないんだから、良いじゃありません？」

「そりゃ、君自身としては、今のままで不幸じゃないかもしれない、しかし、僕としては、君を客観的に見たんだよ、女性が一人で年を取つて行くのは、幸せとは思えない」

「私がいらなくなったの？」

「もの分りの悪いことを云うね、僕の気持は分っている筈だろ、ただ、この頃、君に対して父性愛らしいものを感じて来たためかもしれない、僕も年だよ」

そんな会話が、夏頃から二人の間で取り交わされるようになった。

父性愛という言葉で、葉子は榊原の年を感じた。榊原良介は四十八歳である。

榊原の学歴は中学校だけであった。世界金属工業の部長クラスで、大学出でないのは、榊原だけであった。異例の出世である。

榊原が事業本部長という要職にありながら、取締役になっていないのは、学歴のせいらしい。

しかし、榊原の実力は、最高幹部を始め、部下も一樣

に認めている。理論派ではないが、経済の流れ、時代の流れに対する勘は鋭く、その実行力も抜群であつた。

榊原は背は余り高くない。五尺三寸ぐらいだろうか。肩幅は広くがっちりしている。厚い胸の上に、その年とは思えない締つた顔がのつている。

色は黒く眉毛は濃い。鼻口が張つていて、如何にも金屬工業会社の事業本部らしい頑丈な精悍さがみなぎつてゐる。

榊原は、葉子と会う約束を大抵秘書室でする。灯台下暗しというのか、この方がかえつて周囲には分らない。葉子に用事がある場合、彼女は首を振ることにしてゐた。

葉子が頷くと、

「社長の客は帰つたの？」

と普通の声で尋ねた。

「まだです」

「じゃ、後にしよう」

榊原は、葉子の指を人差指で一寸触れ秘書室を出て行つた。

榊原が誘つたのは、二週間振りぐらいだろうか。葉子

は念を入れて化粧し定時に社を出た。二人が待ち合せるのは、何時も阿倍野の喫茶店であつた。一流繁華街では人眼にふれる怖れがあつた。食事も、榊原が知つてゐる小さな店で済ました。それか、思い切つて郊外に出る。日曜日以外の、和歌山、奈良、京都、二年間に二人は色々な場所であつた。

ただ、それ等の場所で、葉子が榊原と会うのは夜であつた。

ウィークデーの古都の夜の、ひっそりした雰囲気は、何時か真月葉子の胸の中で、榊原のイメージと重なつてしまつてゐた。

葉子は阿倍野交叉点の近くの喫茶店で、榊原を待つた。火曜日の夕刻である。喫茶店は満席に近い。榊原は五時過ぎにやつて来た。

葉子と視線が合うと、葉子の席には来ないで店の外に出た。

榊原は阿倍野交叉点でタクシーを拾つた。先に乗り込む。数歩後ろを歩いてゐた葉子も小走りに追付いて榊原の傍に腰を下ろした。大阪の街を歩く時は、たとえ場末でも、二人は並んで歩かない。

これはなかなか出来ないことである。だが、葉子は頑なな程、それを守った。

二人の関係を長続きさせようと思えば、自分の感情を甘えさせては駄目である。

「大学を出ていて、君のような古風な行動を守り続ける女性には居ないね」

或る時、榊原は感嘆して云ったことがあった。葉子は次のように答えている。

「大学を出たからと云って、女が男に変わるわけじゃないわ、私は平凡な女です」

「君が結婚したら、きっと良妻賢母になるだろうな」

だがその時、葉子は微笑しただけで、答えなかった。榊原の観察は、愛人としてよりも普通の男性の意見のようであった。

葉子は自分程、良妻賢母に縁の遠い女性は無いと思っていたのである。

一見、古風に見える葉子の行動は、二人の関係を長続きさせたいという、女の欲望から発したものである。それは見方によれば、どす黴いものに属する。

二人は、和歌山に近い或る海岸の小さな旅館に入っ

た。二三次来た旅館である。

二人は木槽の湯で疲れを落した。タクシーで一時間程だが、こうして榊原と郊外の旅館に落ち着くと、大阪を遠く離れた感じがする。

葉子の身体はそんなに太っている方ではない。寧ろきやしゃである。乳房も小さい。だが、肌だけは、なめらかであった。

関係が二年も続くと、風呂に入っているてもお互の身体を余り意識しない。葉子は広い榊原の背中を流した。

葉子は、榊原の背中を流しながら、良く木島との関係を思い出した。

あれ程、熱烈な恋愛をしながら、葉子は木島の背中を流したことがなかった。

これは不思議な相違である。木島との恋愛は、お互が火花を散らし合う男女の格闘であった。その意味で、木島と葉子は対等であった。だが、榊原との場合は違う。

葉子は、割合素直な気持で、榊原につかえることが出来るのである。

年齢の開きのためだろうか。榊原の魅力のせいかな。

風呂から出、浴衣に着換え食卓で向いあう。この旅館は新鮮な魚が旨い。恋人達はどうして、このような郊外のひなびた旅館を探さないのだろうか。

榊原に、郊外の旅館をあっちこっちと案内されながら、葉子は、大声で部下を怒鳴り、足音を立てて社内を歩き廻る、この叩き上げた部長の中にひそむロマン性を感じていた。

「今日は疲れた、肩がこって仕方がない」

「余りお仕事をなさり過ぎるからよ、会社の重要なことは、総て部長さんが引き受けるんだもの、いいえ、押し付けられるのね」

そう云いながらも葉子は、素早く榊原の背後に廻り、肩を揉み始めた。背中を流すのと違って、盛り上った男の固い筋肉を揉みほぐすのは容易ではない。

「良いよ、なんならあんまを呼ぼう、それより飯だ……」

榊原は何か云い掛けて止した。葉子に、その言葉は分っている。腹が減っちゃ戦さも出来ぬ、と云おうとしたのだ。だが、榊原は今日何故何時もの冗談を口に出さなかったのだらう。そう云えば、今夜の榊原の表情は何処

か暗かった。いや、今夜だけではない。最近、なんだか暗く感ぜられる。

榊原は、葉子と二人切りになると、めったに感情を現わさない。仕事の上や、家庭生活の面で色々苦労がある筈である。それを葉子に感じさせたことはなかった。

家庭面の苦労というのは、榊原の妻の和枝のことである。二人の仲が余り良くないのを葉子は知っていた。和枝は派手好きな女のようにあった。

葉子が噂で知ったところによると、榊原の妻は一時、T歌劇団に居たことがあるらしい。

葉子は、一見武骨な榊原と少女歌劇に居たという和枝との若き日のロマンスが不思議であった。榊原は和枝について、葉子に話したことはない。

窓からは淡輪の灯が見える。四国通いの船が出て行く。切り払われた松林の先に、黒い海がある。汽笛の音が響く。

波は静かであった。榊原と向きあっていると、葉子は会社内の出来事を良く話した。

社員の噂話もある。最も俗っぽい会話だが、葉子が会社内のことを話すと、榊原は熱心に聞き入り、質問した

り、自分の意見を云ったりする。

井戸端会議と同じ性質のものが話題の種はつきない。

それがまた二人に取っては最も楽しいから不思議であった。

榊原と交際するようになってから、葉子は自分の変化をはっきり感じた。

高踏的な会話や、もったいぶった云い廻し方が、わずらわしくてたまらない。

自分であきれる程、平凡な女になっているような気がする。

「ねえ、今日はなんだか元気がないわね」

「うん……」

「余程大切なお仕事のことでも考えているの」

「馬鹿だな、そんな時は君と会ったりはしない」

「だって……」

「御免、僕が悪かった、ところでどうだな、結婚の話……」

「いやよ、御免だわ」

「それじゃどうだい、バーでもやってみないか」

「バー……私が……」

余りに突飛な言葉に葉子はまじまじと榊原を見た。榊

原は飲み干したコップを卓上に置きながら、

「そうだよ、君がするなら五百万ぐらいの金は出せる、

五百万じゃたいした店は出来ないだろうが、始めから大きくするより……」

「榊原さん、私を会社から出したいの？ 二人の関係が誰かに見付かったの？」

「その気配は充分あるね、しかし、そのために、こんなことを云い出したんじゃない……君が今のまま、あの秘書室で年を取って行くとすると、なんだか嫌なんだ……」

榊原は、決して責任逃れに云っているのではない、と付け加えた。

二人の間が、暴露したかも知らない、という言葉について、榊原はそれ以上説明しなかった。しかし、葉子は、はっきり感じた。

榊原が、……かもしれない、と云った時は、した、と断定しても良い。

葉子は大変なことになった、と思った。もし本当に暴露したのなら、現在の生活を根本的に考え直さねばなら



ない。

葉子はそれを云って、説明を求めた。

「はつきりしたら、教えるよ、この夏が過ぎてから、どうもつかなくなった、いや、二人の問題だけじゃない……」

「仕事の方も、上手く行かないの？」

「うん、まあな、真月君、どうだい散歩しないかい」

榊原は気を変えたように云った。こんな時葉子は、榊原について行けないような気がする。自分には手の届かない大人だ、という感じである。

二人は海辺に出た。堤防の下は荒い小石の浜辺であった。堤防の上に立つと、矢張り風の流れが強く感じられる。波の音もきつい。二人は浴衣姿であった。

葉子は小石を拾って投げた。波打際で、どぶんと音がした。榊原は笑いながら、投げた。音の距離から云っても、葉子の三倍は飛んだだろう。

「一度聞こうと思っていたんだが、君が現在関係している男性は僕一人かい？」

そういう間も榊原は石を投げている。

「ええ、お生憎さま、お一人です、私、あなたのように

浮気者じゃないもの」

「怖いね……」

葉子は唇を咬んだ。榊原は明らかに葉子の言葉を肯定していた。葉子も榊原が、自分一人を守っているとは思ってはいない。事業本部長である。待合にも行くし、バーにも行く。

夜の勤めが、一週間ぶつ通しということもある。浮気をしない、というのが不思議だった。

「落すわよ」

葉子は榊原の後ろから腰に手を掛けた。

「落して欲しいね」

「本当に落すわよ」

葉子は力を入れた。榊原はふん張った。どんな力なのか、びくりとも動かない。葉子は腹が立って、手を離れた。榊原が力を抜いた時、思い切り身体ごとぶつかった。

堤防の高さは丁度人の背丈ぐらいである。

「あっ……」と叫んで榊原は堤防から足を踏み外した。

榊原は横倒しになって、小石の上に転落した。葉子は思ひ掛けられない結果に吃驚して堤防から飛び下りた。下駄を